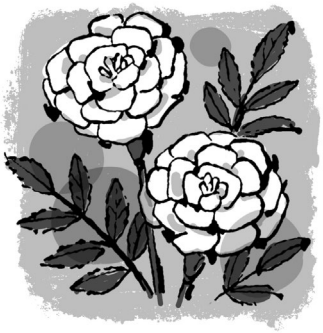
今週の
倫理

2023. 11. 11〜11. 17

11 月のテーマ　|　決心

1359号

苦境を切り開く決心は全てを受けとめる覚悟から



「決心は九分の成就」と言われます。決心したができなかった、という人がいるかもしれませんが、それは真の意味での決心ではなかったとも考えられます。決心には、全てを受けとめるという覚悟が伴うのではないでしょうか。

千葉県在住のM子さんは昭和四十一年に純粋倫理と出合い、その後は七人の子供を育てつつ、夫の事業を支えてきました。

昭和五十六年、当時四十一歳だったM子さんは、一番下の子が三歳だったある日、医師から思いがけない宣告を受けました。

体調不良で入院していた夫が、精密検査の結果、癌だと知らされたのです。当時の癌は治る見込みの薄い病気でした。入院から三カ月後、夫は四十六歳の若さで旅立ちました。最期の言葉は「A彦とK彦、Y生とD輔と……」と、六歳の双子と、五歳と三歳の子供たちの名前だったといいます。

突然の、そして若過ぎる夫の死に、〈なぜ、どうして〉という思いが渦巻くばかりで、前を向くことができなかったM子さん。そうした彼女に、純粋倫理を学ぶ経営者・T氏が寄り添いました。そして氏は、自分が身内を亡くした後に受けた倫理指導の際にかけられた言葉を教えてくれたのです。

「何を言われても納得がいかないかもしれない。でも、納得がいかないからといって足踏みしていたのでは前に進まない。納得のいかないことは心のポケットにしまって、前に進むしかないのです」

それを聞いたM子さんは、〈私が生きる道はこれだ〉と心が決まりました。そして、〈父親が亡くなったことを理由に、子供たちに惨めな思いはさせたくない、夫も私もそれは望まない。それぞれの人生を存分に輝かせてもらいたい〉と思いました。

当時二十歳の長男が「家のために大学を辞めて働くよ」と申し出ると、M子さんは「お父さんの死はお母さんの人生。あなたは自分自身の人生をしっかり生きなさい」と、思う存分勉強に励むよう促しつつ、夫の死を〈自分の人生〉と真正面から受けとめました。そして、亡き夫の分まで〈自分は人の倍働こう〉と決心したのでした。

その後、夫の事業を整理し、友人の紹介で東京築地の魚河岸の仕事に就きました。その時、四十三歳。そして、毎朝一番電車で出勤、魚河岸で昼まで働いて午後は新鮮な魚を仕入れて行商に歩く、帰宅後は家事と育児、という生活をスタートしました。

周囲に支えられながら必死に働き抜いて、七人の子供を育てあげました。現在、子供たちはそれぞれに家庭を築き、M子さんはたくさんの孫に囲まれて暮らしています。

夫が急逝して以来、毎月一回、家族でお墓参りに出かけますが、多い時には二十八人になります。墓参の後はレストランで食事をするのが恒例ですが、度々「団体さん」と案内されると言います。

必死に生き抜いた日々を、「七人分苦労しただけ、七倍幸せになりました」と振り返り、「今が一番幸せです」と満面の笑顔で語るM子さんです。

え・城谷俊也